

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 2 年 6 月 21 日現在

機関番号：12608

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2017～2019

課題番号：17H02273

研究課題名(和文) 復興期における震災文化の研究 宗教研究からのアプローチと実践

研究課題名(英文) The post-disaster culture during the reconstruction period : An approach from religious studies and the involvement research

研究代表者

弓山 達也 (Yumiyama, Tatsuya)

東京工業大学・リベラルアーツ研究教育院・教授

研究者番号：40311998

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 11,700,000円

研究成果の概要(和文)：私たちは(1)宗教とコミュニティに関して、いわき市にて宗教者へのインタビューを行い、祭礼やイベントへの参与観察を実施し、その成果を星野英紀・弓山達也編『東日本大震災後の宗教とコミュニティ』(ハーベスト社、2019年)として刊行。(2)宮城県南三陸町にて住民とともにさまざまな復興活動をめぐる関与型調査を実施し、町内全入江23ヶ所に関する記憶と画像のアーカイブ化を行い、関係人口招来を目指したパンフレットを作成・ネット公開した。(3)東日本大震災と熊本地震後に被災地で展開される宗教者と市民とが協働するボランティア活動、東京での後方支援、移住者が地域住民と織りなす復興支援を震災後文化として検討した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究課題ではメンバーの学会発表・論文発表以外に、期間内に『東日本大震災後の宗教とコミュニティ』(ハーベスト社、2019年)と『宮城県南三陸町オデッセイア』(オンライン配布)という成果物を刊行することができた。前者は調査地域を福島県いわき市とそこから北上する相双地域(相馬地域と双葉地域)に絞り、時期的には震災直後から復旧・復興対策期(仮設住宅対策や新しいコミュニティづくりが中心の時期)に限定することにより、より精度の高い情報を提供している。後者は作成の準備段階から研究者と地域住民が協働して調査等に関わり、冊子版は同町観光協会にて無料配布され、関係人口招来の一助となっている。

研究成果の概要(英文)：We conducted detailed interviews with religious people regarding religion and community and researched disaster recovery based on the participant observation activities of events such as local festivals in Iwaki City. And we presented the results of our study in "Religion and Communities after the Great Eastern Japan Earthquake." which was edited by Eiki Hoshino and Tatsuya Yumiyama. (2) We collected the memories, records, case studies, and observations concerning all harbors in Minamisanriku Town, Miyagi Prefecture with local people. They were digitally archived and shared online to increase the number of visitors to the affected areas. (3) We examined social action program activities with volunteers and religious people, logistic support in Tokyo, and reconstruction assistance conducted by local people and migrants as "post-disaster culture."

研究分野：宗教学

キーワード：宗教 コミュニティ 東日本大震災 熊本地震 震災後文化 関与型調査

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

本研究申請当時の2016年、避難者数は約14万1千人で(9/30復興庁)国は2016年度から2020年度を「復興・創生期間」と位置付けたが、依然、防災・減災のまちづくりといったハード面から、ストレス、喪失感、孤立などのソフト面まで諸問題が山積していた。2016年の熊本地震に関しては発生から半年で避難者は約18万人から200人弱に減ったものの、復興計画はその端緒についたばかりであった。

この間、東日本大震災について、日本社会学会、日本文化人類学会、日本心理学会、日本コミュニティ心理学会、日本民俗学会、民俗芸能学会などが機関誌において特集を組み、日本宗教学会も『宗教研究』86-2(2012)で「災禍と宗教」の特集を掲げた。こうした論考は社会貢献、公共性、ケア、慰霊・追悼など、震災は宗教研究のアクチュアルなテーマを開拓し押し広げていった。

一方、被災地では、神社の再建、慰霊・供養行事や民俗行事の再開といった宗教文化が地域のシンボルとなって表象されていた。また規模こそ縮小されつつあるが、宗教者や宗教団体の支援活動も続けられ、その一部は社会福祉協議会や行政や仮設住宅自治会との信頼を得ようになり、さらには医療・福祉・看護関係者との協働も見られた。同時にまちづくりのワークショップやイベントには当該地域の宗教文化に根ざした語りや記憶が盛り込まれ、復興のビジョンを形作ろうとしていた。この復興ビジョンは、復興期において改めて顕在化した諸問題「少子高齢化、過疎化、エコロジー、外国人居住者との共生など」を住民自らが語り、考え、合意形成する新たな文化運動(震災後文化)につながっていた。私たちはこうした住民、オピニオンリーダ的な宗教者、ボランティア従事者、行政関係者と、これまで協働しつつ研究を進め、復興のビジョンとそれに連なる震災後文化に、いかに宗教文化的次元(有形無形のシンボルを核に、個人の語り・記憶・伝承・価値観、社会生活・生業・季節にまつわる行事、人間関係のあり方、死生観・世界観など)がレイヤーとして厚く、そして幾重にも挟み込まれているかを知っていた。同時に、民俗学や人類学の一部以外に、こうした震災後文化における宗教文化的次元に注目した研究が少ないことに学術的危機感を募らせ、そこに注目することこそ、現在の宗教研究の重要な役割であるとの認識に至り、本研究課題「復興期における震災文化の研究 宗教研究からのアプローチと実践」を申請することとなった。

2. 研究の目的

本研究の目的は東日本大震災と熊本地震の復興期に向けてのビジョンや諸活動の文化運動的側面を「震災後文化」と名付け、その宗教文化的次元を以下3つの点から追究するものである。(A)特定の地域におけるコミュニティの再編を宗教文化との関わりから明らかにする。(B)被災地における記憶のアーカイブ化を実施し、漁業文化やその世界観の研究を進める。(C)被災地で進む新たな震災後文化の創出における宗教文化的次元の位置づけを確定する。(A)ではいわき市に限定した調査が実施され、(B)では南三陸町の全入江23カ所(本港を含む)での震災前の記憶のアーカイブ化を住民とともにを行い、(C)ではいわき市の他、釜石市、気仙沼市、仙台市、熊本市、東京での新たな震災後文化が対象となり、現場に関わりつつ研究を進める関与型調査の可能性を宗教研究において定式化する。

3. 研究の方法

本研究は4つの班で7カ所(釜石市・気仙沼市・仙台市・南三陸町・いわき市・熊本市)の被災地を中心に調査するものの、年度が下るに従い「震災後文化研究」に収斂していく特徴を有する。対象へのアプローチは参与観察、アクションリサーチを用いるのみならず、現地研究者・地域住民・行政担当者との協働を核に関与型調査を試み、この方法論の吟味・洗練させるところに他研究との大きな相違がある。個々の地域の調査・分析に関しては、適宜、文献調査、インタビュー調査、質問紙調査を用いて分析を実施した。さらに本研究では激甚被害の沿岸部の震災前の記憶をたどり、地域住民と宗教研究の双方の共有財産となるべき記憶のアーカイブ化を進めた。

具体的には研究代表者を中心とする統括のもと、調査対象ごとに上記A~Cの3つの調査担当班に分かれ、研究を遂行していった。その際、(A)コミュニティと宗教担当班は大正大学宗教学研究室に、(B)アーカイブ担当班は立教大学コミュニティ福祉学部東日本大震災復興支援推進室に、(C)震災後文化班はいわき市については大正大学宗教学研究室、気仙沼市・熊本市については大阪大学稲場研究室に研究拠点を設けた。なお全体を統括する統括担当班を東工大弓山研究室に置いた。

4. 研究成果

(A)コミュニティと宗教

コミュニティと宗教担当班は、本研究に先立つ「東日本大震災後の地域コミュニティの再編と宗教の公益性に関する調査研究」(基盤研究C、2014-2017年度、研究代表者・弓山達也)から継続的にいわき市を中心に、宗教者へのインタビュー、祭礼やイベントへの参与観察を行ってきた。

特に大正大学宗教学研究チームは毎年3月にいわき市内の追悼・慰霊行事に出席するとともに、創価学会いわき文化会館を訪問し、いわき市在住の創価学会会員（延べ20人ほど）相双地区の（原発避難を余儀なくされている）創価学会会員（延べ20人ほど）への聞き取り調査を実施してきた。経年的に被災地の現状および創価学会の取り組みを聞き取るとともに、教団組織ないし教団活動の意味と、指導と信仰が自分に与える影響についての体験談を収集した。

また2016年から18年にかけて、毎年5月にいわき市小名浜で開催される市民イベント「どんとやれ大漁旗」には準備段階から関わり、観察とインタビューを実施する関与型調査を実施した。その結果、上記のいわき市他地域の祭礼やイベントと比較することによって、いわゆる「復興イベント」が純粹に世俗的なイベントもある反面、死者の記憶をとめない、震災直後には、宗教者が正面に出ずとも強い宗教性を帯びやすいことが判った。

これらの成果は科研費（研究成果公開促進費、2018年）を得て、星野英紀・弓山達也編『東日本大震災後の宗教とコミュニティ』としてとりまとめることができ、2019年2月にハーベスト社より刊行した。

(B)アーカイブ化

2017年から19年にかけて、立教大学コミュニティ福祉学部東日本大震災復興支援推進室チームは、南三陸町にて住民によるさまざまな復興活動をめぐる参与観察を実施してきた。その多くは、FEC(food, energy, care)自給圏（内橋克人）が、内発的・自発的に生成されてゆく様相を体験的に調査する試みとなった。1年目は入江23ヶ所を中心に写真を撮り、パステル画を作成する手法を検討した。また町役場教育委員会等にて、沿岸部の寺社、石碑などに関する情報収集をしてアーカイブ化の準備を行った。2年目は、こうしたアーカイブをもとに入江における養殖の工程をイラスト入りで説明するなど、関係人口招来プログラムを支援するためのパンフレットを作成。3年目はその成果を14回（1回100分）の講義教材としてまとめ、誰でもがアクセスできるSNS上にアップするとともに、先の先のパンフレットを同町観光協会に無料配布を委託し、同時にオンライン公開（<http://cchs.rikkyo.ac.jp/topics/2019/4813/>）した。

(C)震災後文化

震災後文化班は東日本大震災と熊本地震後に被災地で展開される宗教者と市民とが協働するボランティア活動、東京での後方支援、移住者が織りなす新しい震災後文化に注目してきた。

特に大阪大学稲場研究室チームは、2017年度から2019年度にかけて、継続して宇城市と気仙沼市で教員と院生が復興イベントの関与型調査を行った。具体的には、豊野公民館で開催された「復興祭」と気仙沼市民会館で開催された「コンポジウム気仙沼」を対象とした。その結論、復興イベントの創出過程で、地域住民とよそ者という協働ネットワークが生じていたことを確認。地域の宗教文化と遊びを有機的に取り入れることで、コミュニティのつながりの再確認と拡大を促し、復興感と防災意識に結びつくことが明らかになった。さらに震災後文化を共有する人のつながりは他の地域への支援に広がる可能性も見出された。

一方、大正大学宗教学研究チームは、釜石市と南三陸町で、ボランティアに関わりつつ、関与型調査を実施してきた。ボランティアの参加が減少する中、被災者の孤立を防ぐために宗教者による仮設住宅や公営住宅集会所でのお茶会が継続されていることを確認。また教育活動としてのボランティアの可能性も見出された。震災直後のがれき撤去に代表されるようなボランティアから、環境・地域・高齢化などを見据えるテーマ性のあるスタディツアー型のボランティアに移行し、教育機関が学修の一環としてボランティアをとらえ、その学習効果を検討した。

こうしたボランティア活動は後方支援としても続けられている。本研究では、東京に移住した被災者の子どもたちの学習支援を行っているキリスト教系グループのメンバーたちのヒアリング調査を行うなど、後方支援に注目するとともに、自らが後方支援を主催しつつ調査を実施してきた。特に大正大学宗教学研究チームは、震災後に生まれた宗教文化の新たな役割を確認し、その活動を都市でも援用するため、被災地の現状をさまざまなツールで都市に伝えるアートイベントを2019年・20年に東京都足立区の寺院で開催した。これにより、地方と都市における宗教者・宗教団体のコミュニティ構築の比較検討を実施し、どちらにおいてもコミュニティ構築に関する宗教文化の有効性が明らかになった。

また本研究では、ボランティアに関わりつつ被災地に移住した人々が、地域社会で生業を営みつつ、どう活動を展開するのかについても震災後文化の一つとして注目してきた。いわき市四倉・広野町・榎葉町における田んぼアート、河内村における炭焼き、南三陸町におけるワイン作りなど、移住者が地域住民やボランティアと協働して行う復興活動に足を運び、観察・体験談等を収集した。またこうした震災後文化の担い手が集うワークショップにも可能な限り参加し、特に福島県浜通り地域で2017年から19年にかけて9回に渡って開催された「浜通り合衆国」には継続的に出席するとともに、2017年にいわき市で開催された廃仏毀釈と震災からの復興についての展示「百五〇年の孤独」には、主催者による特別レクチャーと案内のもとで参加した。これらは本研究の今後の展開の一つの方向性を示すものとして位置づけられよう。

なお東工大弓山研究室チームは研究全体の統括を行うとともに、これまで社会学・宗教学で「一步踏み込んだ参与観察」程度で使われていた関与型調査についての検討を行った。その成果は日本宗教学会のパネルディスカッション、日本社会会、「宗教と社会」学会等での報告に結実し、また関与型調査の具体的な記述法をタイムライン、エピソード、ダイアログからなる TLED 法として定式化した。最終年度に予定していたシンポジウムは新型コロナ関連で中止を余儀なくされたが、2017 年と 18 年度末には各チームの成果報告・情報共有、そして聞き取り調査を兼ねた研究合宿（南三陸町・福島県富岡町）を開催した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計17件（うち査読付論文 4件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 朴景善、王文潔、孫雪瑩、稲場圭信	4. 巻 8(1)
2. 論文標題 地域における寺院の社会貢献：熊本県宇城市豊野町の光照寺の防災・復興活動を事例に	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 宗教と社会貢献	6. 最初と最後の頁 101-127
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） info:doi/10.18910/68259	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 稲場圭信	4. 巻 2018年8月号
2. 論文標題 地域に生きる寺院の災害時協力	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 だいつん（曹洞宗島根県第二宗務所）	6. 最初と最後の頁 9-10
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 稲場圭信	4. 巻 2018年7月号
2. 論文標題 生きる歩みの伴走者：仏教の利他主義	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 ともしび	6. 最初と最後の頁 1-9
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 稲場圭信	4. 巻 なし
2. 論文標題 宗教の社会貢献 宗教的利他主義の実践と共生社会の模索ー	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 池澤優編『政治化する宗教、宗教化する政治：世界編』岩波書店	6. 最初と最後の頁 211-226
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 稲場圭信	4. 巻 なし
2. 論文標題 助ける宗教：ご利益と救いを考える	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 渥美公秀・稲場圭信編著『シリーズ人間科学2 助ける』大阪大学出版	6. 最初と最後の頁 47-65
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山田親義・河東仁	4. 巻 50
2. 論文標題 自治体における国有財産譲与図面の取り扱い	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 法政地理	6. 最初と最後の頁 29-40
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 齋藤知明	4. 巻 なし
2. 論文標題 一僧侶の支援活動と宗教者意識	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 星野英紀・弓山達也編『東日本大震災後の宗教とコミュニティ』ハーベスト社	6. 最初と最後の頁 40-49
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 齋藤知明	4. 巻 なし
2. 論文標題 福音系キリスト教会の支援活動	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 星野英紀・弓山達也編『東日本大震災後の宗教とコミュニティ』ハーベスト社	6. 最初と最後の頁 118-143
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 川副早央里・星野壮	4. 巻 なし
2. 論文標題 浜通りにおけるいわき市の位置づけと震災被害	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 星野英紀・弓山達也編『東日本大震災後の宗教とコミュニティ』ハーベスト社	6. 最初と最後の頁 2-22
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 寺田喜朗	4. 巻 なし
2. 論文標題 新宗教教団の支援活動 創価学会・福島常磐総県の事例から	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 星野英紀・弓山達也編『東日本大震災後の宗教とコミュニティ』ハーベスト社	6. 最初と最後の頁 167-196
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 佐々木裕子	4. 巻 40
2. 論文標題 教育修道会における次世代養成プログラム	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 クロニカ(白百合女子大学キリスト教文化研究所)	6. 最初と最後の頁 8-10
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 弓山達也	4. 巻 35
2. 論文標題 被災地復興と新しい生き方	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 宗教と文化	6. 最初と最後の頁 196-224
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 弓山達也	4. 巻 38
2. 論文標題 東日本大震災後、日本人の宗教観は変わったか	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 心	6. 最初と最後の頁 27-39
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 稲場圭信	4. 巻 なし
2. 論文標題 宗教と社会と自治体の災害時協力	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 清水正之他編『生きる意味』オリエンズ研究所	6. 最初と最後の頁 39-58
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 稲場圭信	4. 巻 1(1)
2. 論文標題 宗教社会学における災害ボランティア研究の構築	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 『災害と共生』	6. 最初と最後の頁 9-13
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) info:doi/10.18910/67184	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 稲場圭信	4. 巻 270
2. 論文標題 分断社会から支え合う社会へ	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 『あらきとつりょう』	6. 最初と最後の頁 32-41
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 王文潔・稲場圭信	4. 巻 7(2)
2. 論文標題 熊本地震の支援現場における宗教者と市民アクターとの連携	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 宗教と社会貢献	6. 最初と最後の頁 17-29
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

[学会発表] 計8件(うち招待講演 0件/うち国際学会 0件)

1. 発表者名 稲場圭信
2. 発表標題 公共空間における宗教の新たな連携 その意義と今後の課題
3. 学会等名 日本宗教学会第77回学術大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 稲場圭信
2. 発表標題 Social Capital and the Role of Religion in Reconstruction after Disaster
3. 学会等名 The 80th Association for the Sociology of Religion Annual Conference
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 河東仁
2. 発表標題 震災復興と伝統的民俗芸能～宮城県南三陸町を中心に～
3. 学会等名 国際日本文化研究センター共同研究荒木班2018年度第2回共同研究会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 稲場圭信
2. 発表標題 宗教と新たなつながりの創出 - 防災・見守り・観光 -
3. 学会等名 日本宗教学会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 河東仁
2. 発表標題 文化政策における地域資源の「活用」をめぐる
3. 学会等名 日本宗教学会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 齋藤知明
2. 発表標題 「復興・創生期間」における震災被災地の支援活動と宗教の役割
3. 学会等名 日本宗教学会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 弓山達也
2. 発表標題 パネル「関与型研究の可能性と課題」
3. 学会等名 日本宗教学会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 弓山達也
2. 発表標題 祭りが生まれるとき 震災復興イベントの宗教社会学
3. 学会等名 日本社会学会
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計4件

1. 著者名 宗教文化教育推進センター編、佐々木裕子・弓山達也ほか	4. 発行年 2019年
2. 出版社 集広舎	5. 総ページ数 248
3. 書名 解きながら学ぶ日本と世界の宗教文化	

1. 著者名 星野英紀・弓山達也編	4. 発行年 2019年
2. 出版社 ハーベスト社	5. 総ページ数 400
3. 書名 東日本大震災後の宗教とコミュニティ	

1. 著者名 高橋典史・白波瀬達也・星野壮編	4. 発行年 2018年
2. 出版社 明石書店	5. 総ページ数 240
3. 書名 現代日本の宗教と多文化共生 移民と地域社会の関係性を探る	

1. 著者名 池上彰・上田紀行・中島岳志・弓山達也	4. 発行年 2018年
2. 出版社 NHK出版	5. 総ページ数 208
3. 書名 平成論 「生きづらさ」の30年を考える	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	稲場 圭信 (Inaba Keishin) (30362750)	大阪大学・人間科学研究科・教授 (14401)	
研究分担者	村上 興匡 (Murakami Kokyo) (40292742)	大正大学・文学部・教授 (32635)	
研究分担者	寺田 喜朗 (Terada Yoshiro) (40459839)	大正大学・文学部・教授 (32635)	
研究分担者	佐々木 裕子 (Sasaki Hiroko) (60286888)	白百合女子大学・基礎教育センター・教授 (32627)	
研究分担者	星野 壮 (Hoshino So) (60725381)	大正大学・文学部・専任講師 (32635)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分 担 者	河東 仁 (Kawato Masashi) (80224799)	立教大学・コミュニティ福祉学部・教授 (32686)	
研究 分 担 者	齋藤 知明 (Saito Tomoaki) (80646224)	大正大学・人間学部・専任講師 (32635)	